

2016年 09月 30日

## 博報財団 第10回「国際日本研究フェローシップ」成果報告書

## I. 研究成果概要

※定型フォーマット有 (A4 1~2枚)

※全て日本語で作成

氏名 在住国名	GROSSMANN Eike Ursula (グロスマン アイケ ウルスラ) ドイツ
所属・役職	ハンブルク大学 人文科学部 アジア・アフリカ研究所 日本学科 助教授
招聘回 (招聘研究期間)	第10回 (15年9月1日~16年8月31日)
受入機関	早稲田大学
招聘研究テーマ	日本古典文学における子ども・児童観
研究目的	本計画の目的は日本の子ども史研究の成果を踏まえ、古典文学あるいは演劇における一般的な子ども観の意義、そして子どもの社会的な意義を分析することである。

## 研究概要：

文学作品における子どもの描写を分析することで各時代の大人が抱いていた子ども観、子どもの社会的地位を解釈することができる。古典文学、特に平安・鎌倉時代の文学・芸能の作品の中で子どもがどのように考えられていたか、「子ども時代」という期間がどのように理解されていたか、そして大人が子どもにどのような期待を投影していたかを解明したい。そのため、古典文学・芸能の作品に描かれる通過儀礼を中心に、当時のメンタリティーを文化史の観点から追求する。

招聘期間中は、まず文献収集を行った後、研究テーマの焦点を平安時代の物語文学に絞った。文学作品は子どもを空想において描き出すことで、理想的な子ども像を提示していると考えられる。そこから複数の異なる子ども像を取り出し、これらを比較・分析することで、より複雑な子ども観を析出する。

## 展望：

長期的な展望としては、古典文学と芸能の子供ども像を解明した後に研究対象を拡張し、作品とそれが書かれた当時の社会について考察を行いたい。その際には、当時の文学がもっていた社会的機能を重視し、古記録の子どもに関する記述などと今回の留学の成果とを照らし合わせながら、文学作品が描き出す子どもと実在した子どもとの比較を試みる。それができて初めて、他国で同時代に制作された作品との比較が可能になるだろう。

以上のような展望のもと、まず、留学中の成果とこれまでの研究成果とを関連づけ、教授資格申請論文として完成させる。その後ドイツの大学に論文を提出し、審査を受け、書籍として出版する。論文が受理された後には、史料を家族史または政治等との関連から新たに考察し直し、それに関する論考を付加したうえで出版することも予定している。本書は日本の歴史的な子ども観を海外の読者に紹介する、貴重な文献となるであろう。また、その間に分析した史料のうち、英訳あるいは独訳がないものに関しては、これを翻訳することも考えている。それがドイツ語圏で日本学を学ぶ学生にとって有益な資料となることで、本研究が教育面でも大きな貢献をなすことを望む。

なお、来年四月イギリス・カンタベリー・クライスト・チャーチ大学で行われる学会「中世の家族と権威」への参加を予定している。これが実現すれば、日本学研究の枠組みを超えた学際的交流の機会となるはずである。私はそれが個人的な交流のみならず、日本学の国際化へのささやかな寄与となることを望んでいる。